

あるむぜお82

府中市郷土の森博物館だより

al museo NO. 82

2007年12月20日

'87 6~8

Calendar

府中市郷土の森

体験学習 (くわしくはお問い合わせ下さい)

- ★**星空観測会** 7月24日(金)、8月29日(土) 18:00集合。曇天・雨天の場合は中止。公害と光害で失われつつある都会の星空でも、望遠鏡を使えばこんなに楽しめます。今年の夏は土星のリングを観測する絶好のチャンス。口径21cmの大型反射望遠鏡を用意しております。参加自由。
- 陶芸教室** 7月2日~8月13日までの毎木曜日と8月6日(連続8回)。焼けて、こねて、形作って、削って、焼いて……。土の塊がこの世でただ一つの作具になります。火の力の不思議さを体験してみませんか。これまで陶芸経験の無い方を対象に開講します。講師・山本洋津氏。申込受付6月11日~20日。定員30名、参加費 8,000円。
- 自然探偵団** 集合日は毎月第1土曜日の14:00、第1回目は6月6日。野の花、飛ぶ鳥や昆虫、これらの不思議を探って、自然探偵団が活躍します。年輪を通して子供たち自身の手で、数々の自然を相手に謎々と疑問を解決していきます。貴重な体験が得られること受け合いです。小学校4~6年生。
- おもちゃを作る** 7月28日(火)、8月11日(水) 13:00、園内旧小学校にて。ゴムテッポウ、カンカラガタ、タケエなど、テレビもパソコンもない時代の昔の遊び道具を作ってみよう。劇画やカンカラを用意して昔の小学校の教室に集合/参加自由。

講座 (くわしくはお問い合わせ下さい)

- 武蔵野の植物** 雑木林が武蔵野を代表するように、この地域では特に植物の自然のイメージが強烈です。6月、新緑の時期の合点からこそ、武蔵野の植物の話題をお届けします。
- 歴史講座-史料講話会** 史料を読むことは歴史研究の第一歩。それを楽しくやってみよう。博物館の展示も活用して、時代の雰囲気を感じたい方はぜひ古文書解説にも挑戦。
- 天文講座** 天文好きの少年やこれから星を見てみようと思っている皆さまのために、星の見方をお教

★聖と音楽の夕へ
 高天の星空をゆつくりと味わいたいという方、是非お越し下さい。直径23mのドームはそのまま音楽ホールに。人間の作ったはずの音楽は、いつのまにか大宇宙の響きそのものに聞こえます。
 17:45~18:30 観覧料 500円。

●梅の奨励利用講習会
 “梅といえは梅子”としか言はない人、ちよつとお集まりください。他にも美味しい利用の仕方があります。農家の庭先、ベテラン主婦の協力でご紹介します。
 6月21日(日)、28日(日) 10:00と14:00、府越郡野住町にて、参加自由。



郷土の森博物館の催しをお知らせする行事予定「かれんだー」
 上：開館直後の創刊号。
 B5 版両面単色でした。
 下：最新号。
 A3 版両面でカラー刷り。

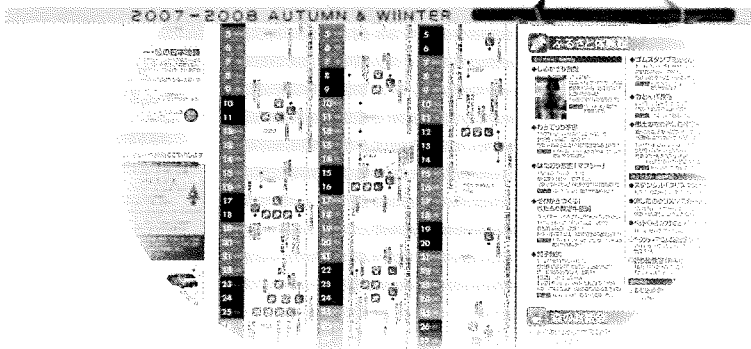
フィールドミュージアム 郷土の森博物館

かれんだー

☎ 042-368-7921

目次

- 1-2 はたちの思い出 その3
 体験学習の森へ、地域の博物館へ
- 3 展示会案内
 特別展 発掘！府中の遺跡
- 4-5 ノート ペガサスからペガサスIIへ
- 6 収蔵庫のニューフェイス
- 7 最近の発掘調査
 国府で発掘された銅の鈴
- 8 展示室リニューアルトピックス ⑦



はたちの思い

hop!

その 3

体験学習の森へ、 地域の博物館に

step!

小野一之

住む人がいなくなった古い建物が点在し、使う人がいなくなった道具類が展示されているからといって、「郷土の森」は、“死都”ではありません。府中市郷土の森博物館が、「府中の歴史・地理的景観の保存と再現を試みた、かつての府中の縮図的表現」であり、「展示や行事を通して、失われつつある日本の文化を再認識」していく場であるべきことは、前回のこの欄で、設計者の方からも提言されています。開館してからの 20 年間は、まさに「郷土の森」が、利用者や市民の方々から息を吹き込まれ、未来につながる生きた「博物館」となっていく歩みだったと言えます。

入口から続くケヤキ並木は、数百年の間、府中の街を見守ってきた大國魂神社参道を再現したものです。懐かしい尋常高等小学校の校舎を左に見つつ、初夏の新緑・真夏の木陰・晩秋の黄葉のありがたさを感じながら歩めば、郵便取扱所・町役場・蔵作りの商家が整然と建ち並ぶ旧甲州街道に出るでしょう。さらに足を延ばすと、「ハケ上団子」の茶店があるハケ（武蔵野段丘の崖、実は多摩川の旧堤防）をはさんで、ハケ上とハケ下でそれぞれ茅葺きの農家が迎えてくれます。その農家の土間と囲炉裏端、庭先の畑と水田、周りの四季折々の自然。これらが郷土の森博物館で行われる体験学習の発想の原点だったのです。

天井から自在鍵が吊るされた囲炉裏端は、家族や来客の集いの場所です。そこでは日本の昔話や世界の民話を聞かせる「森のお話会」が始まりました。土間は、夜間や雨天時に欠かせない作業場所です。縄ないやワラ草履などのワラ細工講座がいつの間にか行われるようになりました。もちろん田んぼには稲が植えられ、毎年収穫の季節を迎えることになりました。どうせなら、博物館所蔵の昔の農具を使いながら……。春に土を耕し、種



こめっこクラブ 「千歯こきだって使えるぞ」

を播き、水が張られるといよいよ田植え。日増しに生長する稲を見守りながらの草取りと案山づくり。やがて黄金色になった稲の刈入れ。ハサ掛け・稲扱き・籾摺りと、深まる秋と競いながら「こめっこクラブ」メンバーによる仕事が続きます。周りでは、野草や草花、野鳥や昆虫が細やかな季節感を演出してくれるでしょう。このような「郷土の森」の景観は、どこか懐かしい故郷の風景を味わわせてくれるのではないのでしょうか。

「森のお話会」「こめっこクラブ」「自然観察会」などの体験学習は、こうして郷土の森博物館にとって欠かすことのできない活動として定着したのです。その後、1993 年に「ふるさと体験館」が園内に誕生し、より多彩な事業が充実し、今日に至っています。しかし、こうしたなかで得た最も大きな意義は、さまざまな活動を展開する過程で得た、多くの市民・参加者・協力者・ボランティアの方々との繋がりにあろうと思っています。地域のコミュニティの一拠点としての博物館づくりへ、もう一歩前進！

特別展 発掘！府中の遺跡

発掘速報 & 縄文時代の清水が丘

2008/2/9 (土) ~ 3/24 (日)

京王線府中駅の東方の一帯に、縄文時代中期のムラの跡があります。清水が丘遺跡です。

本格的な発掘調査は、1981年、道路建設がきっかけでした。この時に出土した多くの土器は、1987年以来、当館の常設展示室の花形役者として活躍してきました。

その一方、道路建設に伴う発掘調査が終了した後も、周辺では断続的ながら発掘が続いています。その結果、これまでに確認した縄文時代中期の^{竪穴建物跡}は55棟に達し、やはり土器をはじめとする豊富な出土品が得られています。清水が丘遺跡は、多摩川流域の縄文時代中期の集落遺跡としては大規模で、^{拠点}的な存在だったことが徐々に明らかになってきているのです。こうした新しい成果は、速報展示で紹介してきたところですが、全容を展示する機会はありませんでした。

幸い、というべきでしょうか、このたび、常設展示室のリニューアル工事が始まり、道路建設に伴う調査資料は、しばらくの間、収蔵庫にしまわれることになりました。この機会に、これまでに蓄積された清水が丘遺跡の全容を紹介すべく、〈縄文時代の清水が丘〉展を開催することとしました。豪華でボリュームたっぷりの縄文土器など、出土品の数々をご覧いただきたいと思います。あわせて、市内の最新発掘資料も速報展示します。

(深澤靖幸)

ペガサスからペガサスⅡへ

本誌 76 号でご紹介したように、ペガサスは 2006 年 3 月 21 日の太陽観望会を最後に、排ガス規制と車両の老朽化にともなって引退しました。

そのペガサスに代わって 2007 年 2 月に、新しい移動天文観測車が導入されました。一般公募により名前は「ペガサスⅡ(ツー)」。ボディには天馬ペガサスが羽ばたく様子と北斗七星が描かれ、初代ペガサスの面影が残るデザインとなりました。名前とデザインは、応募当時小学 6 年生で市内在住の小澤太一さんによるものです。本稿では、新旧ペガサスの交替によって、どこまで宇宙が見えるようになったかに迫ります。(以下新旧ペガサスを新型と旧型で標記)

☆ 新型車両は小ぶり

望遠鏡の見え味には直接関係ありませんが、新型の移動天文観測車はワンボックス、旧型の 4t トラックベースに比べると随分小さくなりました。旧型で目を引いた銀色のドームがなくなり、見た目の奇抜さもなくなりましたが、車高も半分近く低くなり、今まで通れなかったような道も通行可能となり、天体観望会の出前の範囲は広がりました。旧型は 4t トラックでしたので、運転をプロにお願いしていましたが、新型は一般のドライバーでも十分運転でき、バックモニターなど安全装備もばっちり、職員が運転して出かけられ経費節減にも役立っています。

☆ 望遠鏡はコンパクトながらも大口径！

望遠鏡の良し悪しは、倍率で決まるわけではありません。レンズや鏡の基本的な性能がしっかりしていることを前提とすれば、どれだけ光を集められるか、すなわち口径にかかってきます。旧型の口径は 20 cm でしたが、新型では 35 cm になり



新しい天文観測車 ペガサスⅡ

ました。直径では約 1.5 倍、面積では、約 3 倍となり、それだけ多くの光を集めることができます。次頁の表から望遠鏡の能力を探ってみましょう。

郷土の森博物館の星空観望会などで通常使っている小型望遠鏡は、高橋製作所製の口径 7.6 cm ですが、屈折望遠鏡であればこの前後のものを最初に手にする方も多いと思います。これでも肉眼に比べれば格段の性能ですが、大口径望遠鏡には及びません。

旧型のはそれよりも格段にすぐれた性能を持っていましたが、新型のはさらに性能がアップし、旧型と比較すると集光力(注 1)が約 3 倍、限界等級(注 2)が 1 等強、分解能(注 3)が 2 倍に上がりました。新型の能力は世界最大級の公開望遠鏡「なゆた」や日本が世界に誇る「すばる望遠鏡」にはとても及びませんが、どこにでも移動できる望遠鏡としては十分誇れます。なんと言っても公共施設のコンピュータ制御の移動望遠鏡では最大級の口径なのでから。

☆ 大望遠鏡はより天体に近づける！？

倍率のことをここで少しご紹介しておきましょう。一般的には、望遠鏡の焦点距離 ÷ 接眼レンズ(アイピース)の焦点距離で求めることができます。例えば新型の焦点距離が 3,556 mm なので、20 mm のアイピースで見ると、約 178 倍、50 mm のアイピースだと約 71 倍となります。アイピースの

焦点距離を短くすれば 1,000 倍もの高倍率が可能ということになります。しかし、倍率が高ければよく見えるのかというと、必ずしもそうではありません。口径によって最低倍率・有効倍率などが決まります。これは、人の瞳径の大きさとの関係で決まるものです。最低倍率と有効倍率の範囲外の倍率は、高倍率だと視野が狭く、分解能が足りずぼやけて見え、逆に低倍率の場合は口径の小さな望遠鏡で見ているのと変わらなくなります。

新型は口径が大きくなった分高倍率にでき、天体により近づけます。例えば月までは約 38 万 km 離れていますが、旧型の有効倍率 200 倍では、約 1,900 km まで、新型の有効倍率 356 倍だと約 1,070 km まで近づいて見たのと同じになります。新型導入に合わせて新調したアイピースは、焦点距離が 55 mm から 5.5 mm まで 10 種、倍率で言うと 65 倍から 650 倍までで、見る天体や空の状況に合わせて選ぶことができるようになっていきます。

余談ですが、近視と遠視の人が天体望遠鏡をのぞくと倍率はどうなるのでしょうか。眼鏡あるいはコンタクトを外してみると少し倍率は変わります。例えば近視の人は数パーセント倍率が高く、遠視の人は逆に倍率が低くなります。同じ望遠鏡で同じ倍率で見ている、見る人の視力によって倍率が少し変わってしまうのです。



ペガサスⅡの望遠鏡

★ もっときれいな星空を求めて

新ペガサスの導入に伴って、望遠鏡の口径は大きくなり、性能が上がったことはお分かりいただけたと思います。肉眼で 6.5 等星まで見ることの出来る、大気の安定した理想的な星空の下で、最大限に望遠鏡の性能が発揮された場合には、下表のような比較になります。しかし、府中で見る場合は、夜空が明るいので、どの望遠鏡で見ても限界等級は 3 等級前後落ちます。例えば、2006 年に惑星から外れた「冥王星」は条件が良ければ新型でも見えるはずですが、府中では無理です。

しかし、月や明るい惑星などは、府中の空でも十分に能力を発揮し、迫力のある姿を楽しんでいただくことが可能です。また、今まであきらめていた星雲・星団も見えるようになったので、今後ご紹介する機会も出てくるでしょう。さらに機動力を活かして、空の暗い、星のきれいな八ヶ岳周

辺などに出かけて、望遠鏡の性能を十分活かし、遠い宇宙の姿をご覧ください。ただけるチャンスもあるかもしれません。今後のペガサスⅡの活躍にご期待下さい。

注 1：瞳径が 7 mm の人に対して、どれだけ多くの光が集められるかをあらわす。

注 2：肉眼で 6.5 等星まで見える理想的な星空で、見える最も暗い星の明るさ。

注 3：肉眼では、視力 1.2 の人の値。視力 2.0 の人は 30 秒まで分離できる。

望遠鏡の比較表

種類 内容	ペガサスⅡ (新型)	ペガサス (旧型)	FC76	肉眼	なゆた (西はりま天文台)	すばる望遠鏡 (ハワイ)
タイプ	リッチー クレチアン系	クーデ式 望遠鏡	屈折望遠鏡	—	リッチー クレチアン系	リッチー クレチアン系
口径	356 mm	200 mm	76 mm	7 mm	2,000 mm	8,200 mm
焦点距離	3,556 mm	1,800 mm	840 mm	—	24,000 mm	100,000 mm
架台形式	経緯台	赤道儀	赤道儀	—	経緯台	経緯台
集光力	2,300 倍	820 倍	120 倍	1 倍	82,000 倍	140 万倍
限界等級	15.0 等級	13.8 等級	11.7 等級	6.5 等級	18.8 等級	21.8 等級
分解能	0.33 秒	0.58 秒	1.5 秒	50 秒	0.058 秒	0.014 秒



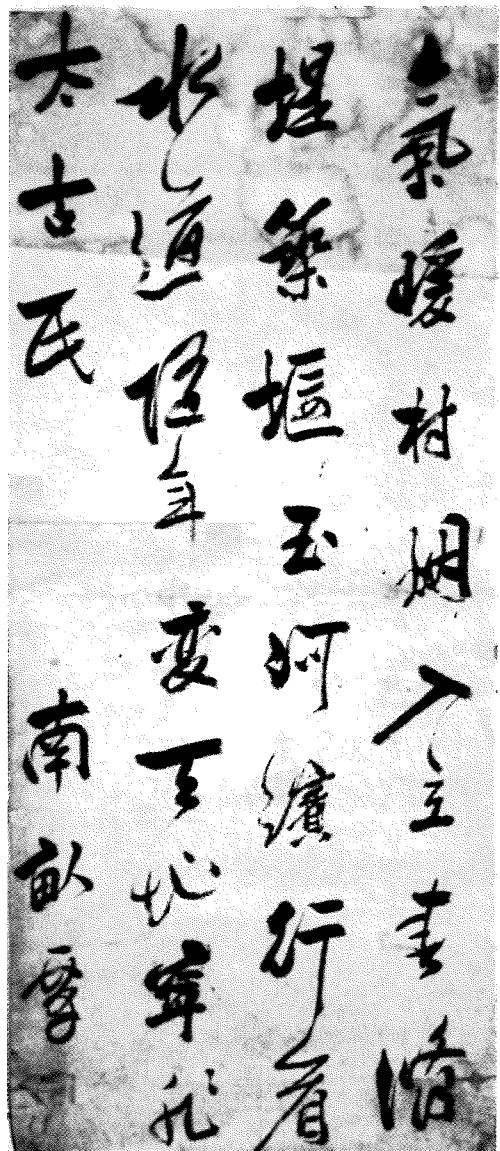
大田南畝書の襖紙
寄贈：矢島 中氏

この資料をご寄贈くださったのは、郷土の森博物館の復元建物の一つである「旧府中郵便取扱所 矢島家住宅」の旧蔵者です。受入の時のお話では「確かではないが、随分前に本町の万屋さんから戴いた品だと思う」ということでした。全部で4枚あり、それぞれに漢詩が書かれ署名と落款があります。元は襖だそうです。確かに幅53cm、長さ126cmという大きさは、襖の縁と引き手をよけて切り取った位です。本紙は大分黄ばんでしみができていますが、大きな破れなどはありません。長年座敷にあって眺められていたものと思われる。

写真はその1枚ですが「気暖村烟入立春 修堤築堰玉河濱 行看水道随年变 天地寧非太古民」と読めるでしょうか。おだやかな新春の玉河(多摩川)の堤や堰の工事をしていると、長い間の自然と人間の移り変わりを想う、と解せます。

署名は「南畝覃」、天明期～文化文政期(1800年前後)の一大文学者大田南畝で、覃はその字、別号である蜀山人としても有名な人物です。彼は四方赤良、寝惚先生などの名でも狂歌や洒落本の作者として一時代を築いた人ですが、本名は直次郎、身分は御家人で武士の子としての教育を受けており、漢詩文にも堪能でした。

しかし大田家は決して身分の高い家柄ではなく、文学的名声とは裏腹に、彼は生涯を通じて幕府の下級官吏として勤めたのです。その一つに勘定所役人として、60歳の時の多摩川の河川普請監察という仕事がありました。当時は、冬の渇水期に堤防や用水堰の修復工事をし、夏場の



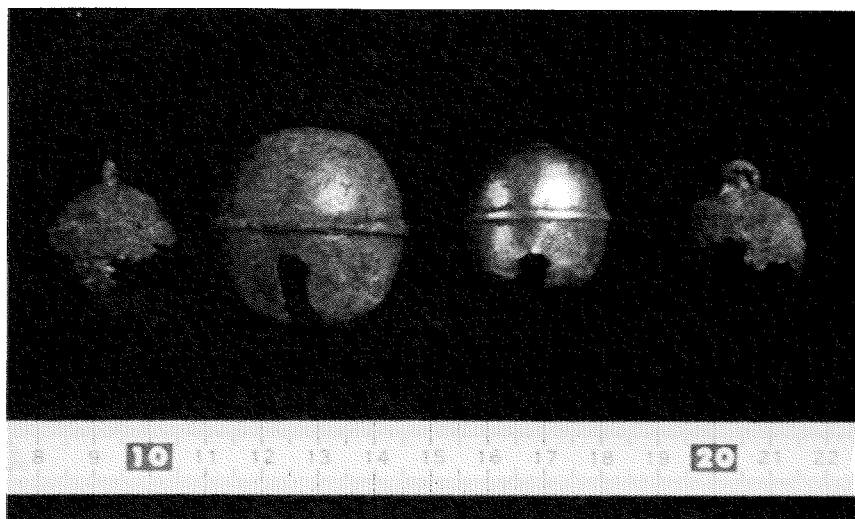
洪水に備えました。文化5年12月から文化6年(1809)4月までの数ヶ月間、彼はそれらの工事監察のため、多摩川沿岸を上流から下流まで何度も往復したのです。

その職務の合間にも『調布日記』『調布日記附録』『玉水餘波』『家伝』『玉川砂利』『向岡閑話』『玉川披砂』と常人にはとても及ばない冊数の著作を残しています。そして、宿泊したであろう村々の有力者の家で「是非ご揮毫を」と乞われれば、思いつくままに一筆したためる事もあったでしょう。市内住吉町の旧家でも、この時期に残されたと推測できる蜀山人の書が伝来しています。

今回の作品がどのような経過で襖に仕立てられたかは、定かではありませんが、詩の題材はまさにこの職務を詠ったものでしょう。

国府で発掘された銅の鈴

片町一丁目 府中市遺跡調査会 紺野 英二



国府出土の銅鈴

暑い暑い夏の始め頃のことでしたが、片町1丁目の調査地区から、古代の銅鈴が発掘されました。古代の銅鈴については本誌69号でも紹介したことがありますので、今回は、国府域で発掘された古代の銅鈴について紹介したいと思います。

今回発掘した銅鈴は、残念ながら、鈴の上半分しかありませんでした。鈴の直径は、やや歪んでいますが、約2.3cmです。鈴の鈕（ヒモなどを通す部分）を含めた高さは、約2.1cmあります。この鈴は、平安時代前期（今から約1,150年前ごろ）の竪穴建物跡から発見されました。鈴の表面には、金色に輝く部分もあるので、金銅製だった可能性もあります。

金属製の鈴は、5世紀ごろに日本列島に伝えられました。当時の鈴の使い方は、古墳から出土した馬鈴（馬具の一種、径約4cm）や、馬形埴輪などにみることができます。また、神楽を舞う際には、鈴を鳴らして使用したり、服飾品の一部としても使用されます。当然ながら、馬の飾りとしての鈴と、舞や服飾品の鈴とでは、大きさが異なることが想像されます。

府中市内で発見された銅鈴のなかで、奈良・平安時代（今から約1,300年前～800年前）の遺構から出土したものは、今回のものも含め6例があげられます。上の写真の銅鈴4例は左から、569・989・1262・1382次（今回）の調査で発掘されたものです。他に、38・702次の調査でも発掘されています。これらの銅鈴は、平安時代前半（今から約1,200年前～1,100年前ごろ）の竪穴建物などから発掘されているので、平安時代前半のものと考えられます。発掘された銅鈴の大きさを比べてみると、どうやら武蔵国府出土の銅鈴には、直径2.5cm前後のもの、直径3.5cm前後のもの、大小2種類があるようです。大きな鈴は馬具に、小さな鈴は人間にと使い分けていたのかもしれませんが。

武蔵国府で発掘された銅鈴が、どのように使用されたかは、謎のままです。今回の銅鈴のように、モノの大きさなどを手がかりに、その用途を想像するのも考古学のひとつの楽しみ方かもしれません。

次数	場所	直径 (cm)	備考
38	府中町 2丁目	2.5	9世紀 前葉
569	分梅町 1丁目	2.6	9世紀 前葉
702	本町 2丁目	1.7	
989	片町 2丁目	3.5	
1262	宮西町 1丁目	2.6	9世紀 後葉
1382	片町 1丁目	—	9世紀 中葉

他に355次で鉄鈴が出土
(直径5.8cm)

⑦ まずは「祭」コーナーから

大型ハイビジョン映像「くらやみ祭」誕生

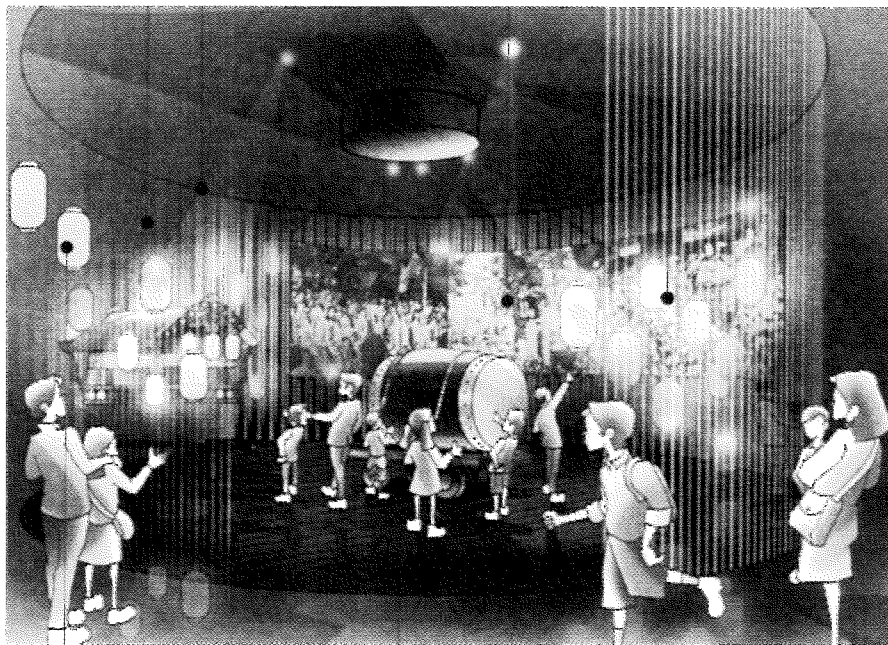
大國魂神社の例大祭で、地域の歴史やコミュニティ形成に大きな役割を果たしてきた「くらやみ祭」。これを紹介するコーナーが、常設展示室リニューアル事業の先駆けとして、明年4月にオープンします。

「くらやみ祭」コーナーで、神輿（旧御本社神輿）・太太鼓（旧御先太鼓）・山車（1/10 模型）・万灯（新作）とともに主役となるのが、祭の全体像を捉えようとした映像資料です。一つ

は、祭の次第を示した高画質ハイビジョンのメイン映像で、160 寸（199 cm × 345 cm）スクリーンを中心に、40 寸のサブモニター4台に同時上映されます。もう一つは、祭を担う多くの方々のうち20名のインタビュー映像です。

メイン映像は、4月30日から5月6日までの一週間に渡る神事・祭礼をタイムスケジュール順に追い、サブモニターの1台には日付・時間・場所が表示されます。これによって、広範囲で多彩に複雑に展開する大掛かりな催事を構造的に見ていく一助になるのではないかと考えたからです。5日夜の神輿渡御（オイデ）をクライマックスに、これに至る山車・囃子・万灯などによる賑やか（付け祭）の部分や、祭礼全体の本当の核にあたるのが固く閉ざされ特定の人しか立ち会うことができず、映像化も許されない御旅所における神事であること、神輿還御（オカエリ）が神々再生の喜びに満ちた祝儀であることなど示してみたいと思います。

インタビュー映像は、祭への熱い思いや昔の思い出、祭の将来像などを、宮司・役員・長老・



「くらやみ祭」コーナー完成予想図

青年・女性ら20名の方々に語っていただきました。一大イベントを主催する神社と伝統的な所役、町内（地元住民）と講中（サポーター組織）、その他さまざまな形で祭礼を支える大勢の人々のリアルタイムの声の一端を記録し、伝えていきたいと思っています。ただ、祭に距離を置く人たちの意見は拾い上げていません。祭＝地域の一体化幻想の隙を縫う実態の伝承は将来的な課題です。

この映像は、2007年3～5月に担当学芸員を含む10数名のチームにより撮影されました。事前に5～6年は毎年密着取材を行ってきました（もっともこれは博物館としての基本的な調査活動の一つですが）。会所で酒を酌み交わしながら、あるいは白丁を着用し神輿を担ぎながらの撮影は、ただ迫力ある画像のためではなく、祭を担う人の視線、見物する人の目線にこだわったからです。ただ、メイン映像の場合、40時間カメラを回し、できあがりには12分ですから、泣く泣く涙を呑んでの編集だったわけです。